

7月最後の週に博物館実習を行いました。これは学芸員資格を取得するための課程の一つで、当館では毎年10人ほどの学生を受け入れています。実習の全体像については2009年8月14日の当ブログでM.F.学芸員がレポートしていますが、今年も5日間のみっちり詰まったプログラムが生まれ、地震対策と文化財レスキューについての講義も加えられました。

3日目の実習「作品の展示と照明」は、私を含め3人の学芸員が担当しました。

まずは作品の配置から。学生を3班に分けて、8点の版画（カンディンスキー×2、ココシュカ×3、ファイニンガー、キルヒナー、コルヴィッツ）の配置を班ごとに考え、壁に立てかけてもらいました。



各班で配置結果は違いますが、同じ作家のものをまとめたり、多色刷りと単色のものを分けたり逆に組み合わせたり、壁全体での作品の大きさのバランスを考えたりと、さまざまな意図が表れていました。学芸員からは「隣り合う作品に描かれた人物が背中合わせになるよりも、向き合った方が落ち着いて見えるよ」とか、「部屋の隅ではそれぞれの壁際の作品を観る人がぶつからないよう、どちらかを広く空けるとよい」といったアドバイスをしました。

照明については、スポットライトの照射角などについて説明後、コルヴィッツの彫刻《恋人たち?》にいろんな角度から光を当てて見比べました。

彫刻の照明にあたっては、その作者が描いた素描や版画などを参考にできることがあります。コルヴィッツの版画では、闇の中で人の頭や手だけが光で浮かび上がったり、複数の人物たちが影を共有するこ

とで結びついたりしているような表現がよくみられます。この《恋人たち?》でも、そんな照明をめざして
てみることにします。



コルヴィッツ《母親たち》 1921/22年



《左を向いた横顔の女性労働者》1903年



《恋人たち?》1913年

二人の頭部や女性の腕などはかなりいい感じ。ライトをもっと作品の真上近くに寄せて少し右に振ってやれば、二人の身体が影の中でより一体化し、恋人の顔を抱き寄せる男性の指の表情も出ることでしょ

う。皆さんも時には絵の配置や照明などにご注意されると、美術館の楽しみ方が増すかもしれませんよ。

実習生の皆さん、お疲れ様でした。

(T.M.)